

観天 望気

絶対的な必需品

経済学の入門書を手にすれば、必需財の定義に出合うことになる。すなわち、所得の増加に伴って消費量が増えるけれども、所得の増加率ほどには増えない品物。これが必需財だとされる。所得の増加率以上に消費されるケースはどうか。こちらは贅沢品。経済学では古風に奢侈財と呼ばれている。

必需財の定義にはエンゲルの法則と重なる面がある。エンゲルの法則とは、所得が多いほど家計に占める食費の割合が小さくなる傾向を指す。食料が全体として必需財であれば、所得上昇とともにエンゲル係数は低下するだろう。もともと、時代とともに食費の中身も大きく変化している。エンゲル係数が5割以上だった戦後まもない日本では家庭調理の材料の比率が高かったが、エンゲル係数2割台の今日では加工品や外食が8割に達している。

経済学は甘い。こんな声が聞こえてくる。これなしには生きていくことができないという意味で、食料は絶対的な必需品だからである。経済学の定義は、あくまでも人々が購入する品物を選択した結果についての基準である。品物の選択が可能な世界、言い換えれば市場経済が有効に機能していることが大前提なのである。けれども現実の社会には、市場の機能不全のもとで必要量の確保が求められる局面がある。多くの栄養不足人口を抱えた途上国だけの問題ではない。災害によって食料の調達が急がれる事態は、ここ日本においても生じている。

加工品や外食の増加で食費の中身が変化したと述べた。見方を変えるならば、食品には実に幅広い選択肢が与えられることになった。今日の先進国において、食料は高度に選択的な財なのである。けれども同時に、食料がこれなしには健康な生活が不可能だという点において、絶対的な必需品であることも間違いない。私たちが生き物である以上、これも厳然たる事実である。高度に選択的で、しかも絶対的な必需品。このように両極端の性質が同居している稀有な存在。それが食料なのである。



生源寺 眞一
福島大学食農学類 教授

しょうげんじ しんいち
1951年愛知県生まれ。東京大学農学部卒業。農林水産省研究員、東京大学教授、名古屋大学教授などのちに、2019年4月より現職。東京大学農学部長、日本農業経済学会会長などを歴任。近著に『新版 農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門』（家の光協会）など。